

3・11後の日本と私 —韓國の大統領選挙後、思い新たに—

私のHuRPとの出会いは昨年6月、「民主主義をソウルで学ぶ」という副題がついたブックレット『金大中図書館に行ってみよう』の出版記念会だった。ある友人から聞いて訪れたのだが、40年前の金大中事件、そして1980年光州事件こそ、私が韓国との関係を深める里程碑だったと、今にして思う。その間に、見よう見まねで始めたハングルが、連れあいとの人生行路を共にする原動力となり、私の人生を深めてくれた。そうした私個人の思いも包む、この企画を通じて私はHuRPと出会い、最近読み始めた肥田舜太郎さんの著作に学びながら、次なる出会いを楽しみにしている。

ところで、私が住む仙台は3・11を機に大きく変わるはずだった。いや、私は変わることを期待したが、今は石巻・福島などの被災地に向かう「復興の拠点都市」としてミニバブルの渦中にあり、「土建国家・日本」の旧習に引き戻され

てしまった。その一方で、肥田さんが指摘する「低線量内部被曝の怖さ」を身をもって体験している福島に隣接する「被曝の実験都市」、という側面にも向きあわざるをえない。「E T V特集：チェルノブイリ26年後の健康被害」と銘打つ『低線量汚染地域からの報告』(NHK出版)がとりあげたコロステン市は原子炉から140km（仙台は福島第一から約100km）にあたる。事故後の特殊状況があったとはいえ、26年後の健康被害は決して他人事とは思えない。

私自身も、昨年11月福島人権宣言の集会でチェルノブイリ現地報告とフクシマを取り巻く社会状況を聞き、そして内部被曝関連の本を読むまではもう一つピンと来ていなかつた。だが今、私の認識は変わった。その契機をもう一つ上げれば、昨年12月に行われた日韓両国での選挙結果（※1）だろう。日本の総選挙はある程度予想されたが、あまりに

もひどかった。ただ、そこに至る石原の「尖閣発言」以来の流れを振り返れば、市民レベルでの脱原発の動きを覆い隠すため、領土ナショナリズムを扇動した人々の悪辣さと、それに便乗する日本人の愚劣さを痛感する。3・11後2年弱にして、この政治状況に直面するとは、1年半前に誰が予想しただろうか（私は菅元首相による解散を強く主張したが…）。昨年4月来の政治の流れは野田一石原合作の出来レースで、彼らは大成功を収めたと言える。

さて、その結果として、今後何が起こるのか。日中間に軍事衝突が起きないことを願いながら、日中経済バトル（※2）を覚悟せざるをえないのではないか。特に、中流以下で暮らす私たちの経済生活は、消費税を含めて大打撃が予想される。実は、この日中経済バトルの帰趨を決するのは韓国の市民社会の動向であり、その意味で昨年12月、日韓両国での保守強硬派の「連勝」に、白楽晴『韓国民主化2.0』（岩波書店）の訳者である私は大きな危機感を抱いた。

だが、状況はそれほど単純ではないようだ。今回1週間余り訪韓し、新聞・週刊誌の類や韓国の友人たちとの話から判断すれば、韓国は当分様子を見ながら、国内外の事情に後押しされて「親日派」の汚名を避けて中国を選択し、南北関係の打開に向かう可能性がある。帝国日本と冷戦時代の価値観に生きる

安倍政権は「敗北の道」を歩むだろう。ただ問題は、その敗北の意味を事前に察知しながら、どのような「変革のビジョン」を準備しうるかだ。その場合、ここ数年日本国憲法を変えさせないことが、まずは重要である。

それ以外では、「語り部」運動のようなゲリラ戦が必要ではないか。家庭で、地域で、職場で、各自ができる範囲で、自分が知り、学んだ情報を友人・知人に語り伝えること。その際、今までの護憲運動タイプの大義名分をかざすより、大義を意識した上で具体的な情報や知識、例えば「原爆・原発・放射能被害の怖さ」、とりわけ「内部被曝の怖さ」を語り伝えることだ。そして、肥田さんが主張する「放射線被害を人権に対する最高の侵害である」と捉える認識を、私たちの間で共有したい。これらについては、私自身が学び始めたばかりなので、今後みなさんとの交流・討論を通じて深めていきたいと思う。

（青柳純一）

※1 2012年12月19日、韓国で大統領選挙が行われ、保守系与党・セヌリ党の朴槿恵（パククネ）候補（60）と革新系野党・民主統合党の文在寅（ムンジェイン）候補（59）との保革一騎打ちの末、与党が辛勝した。

※2 バトルとは、軍事的戦いではなく、政治・経済・社会的戦い。

【HuRP の本棚】

肥田舜太郎・大久保賢一

『肥田舜太郎が語る「いま、どうしても伝えたいこと』』

(2013年2月上旬刊行、日本評論社、定価1470円)

□ いま、本当の「命」と「人権」を語る

「僕の自分史の中で一番、いいものになつたと思うよ」

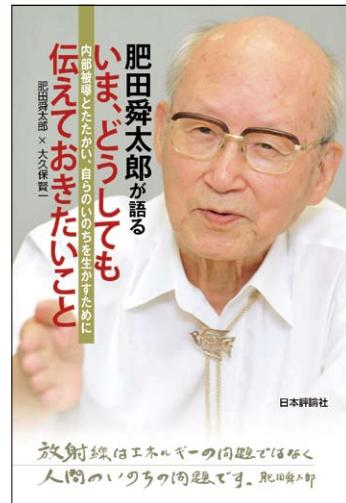
1年半かけてやっと形になった原稿を見終わった肥田先生の言葉である。

本書は、肥田先生自身が言うように彼の生き方と思想のすべてが凝縮されている。

肥田先生が語る一つひとつの言葉の中に、生涯を通じての放射線とのたたかいと、そこから自らのものとした「思想」が込められているからである。

3.11直後に起こった福島第一原発事故は、原発そのものの存在を問うだけでなく、原発から飛び散った途方もない放射線が、人体や自然に対して多大な被害をもたらすことを、不幸にもわれわれに教えてくれた。

振り返って日本は、1945年8月6日に人類で初めて使用された原爆により大きな被害を受けた。その被害のうち、原爆によって発せられた放射線が人体にどのような影響をもたらすかに関して、当時すでにアメリカによって調査がなされていた。にもかかわらず、いま現在でも調査資料は公になっていない。



「ヒロシマ」以後、医師として放射線と対峙した肥田先生は、「内部被曝」問題にたどり着く。1970年代にこの問題を正面から提起した。

その肥田先生が「武器としての核兵器は、その瞬間に大量の殺戮能力を持つばかりでなく、発した目に見えない放射線によって人を殺し続ける」「原爆も原発も同じ材料から作られたもの」と言い切る。半世紀以上、放射線被害とたたかつてきたからこそ言える言葉だ。

「内部被曝」という解明されきっていない問題を前に、多くの人が抱く恐怖と不安に対して、核兵器の本質を語り、原発の安全神話のウソを明らかにする中で、肥田先生は、放射線とたたかいながら、「生きること、命を生かして生き抜

くこと」こそが最も大切だと言い切る。二人といない人間一人ひとりの「命を生かす」ことこそ「人権」の本質、肥田先生が、いま伝えたいことの核心は、それなのかもしれない。

(串崎)

～平和、裁判、政治を憲法の視点で検証～ 【法学館憲法研究所報 第8号】刊行 !!

法学館憲法研究所が2012年秋に開催したリレー対談「日本社会と憲法」(全3回)の講演録と対談録を収録しています。

水島朝穂氏(早稲田大教授)、村井敏邦氏(大阪学院大教授)、森英樹氏(名古屋大名誉教授)の講演と、その後の浦部法穂・法学館憲法研究所顧問(=HuRP理事長)との対談を収載しています。



◀目次▶

巻頭言 浦部法穂

リレー対談「日本社会と憲法」

[所長あいさつ] 伊藤 真

[講演] 平和と憲法—"武力なき平和"のリアリティ 水島朝穂

[対談] 水島朝穂・浦部法穂

[講演] 裁判と憲法—裁判員制度・死刑制度を考える 村井敏邦

[対談] 村井敏邦・浦部法穂

[講演] 政治と憲法—選挙制度・政党のあり方 森 英樹

[対談] 森 英樹・浦部法穂

〈論考〉 福島第一原発事故を招いた司法の責任を考える 藤井正希

◎B5版、100ページ、800円(税込み)

【購入・お問い合わせ】TEL: 03-5489-2153 E-mail: info@jiclp.jp (法学館憲法研究所)

【編集後記】 ▶2013年が始まり早1ヶ月。みなさま、新たな1年をどのように迎えられたでしょうか。遅ればせながら新年のご挨拶—今年もHuRPと会員のみなさんにとって実り多き年でありますように! そうなるよう、通信はじめHuRP主催イベントや新企画など、充実したものをお届けしたいと思います。本年もどうぞよろしくお願ひします。▷1月17日で、阪神・淡路大震災から18年。イルミネーションや灯篭の点灯など追悼・鎮魂のイベントが各地で開催された。震災と人災の爪痕が深く残る東日本大震災のその後…10年、20年後はどんなものになるだろう。失われたいのち(人権)と今生きるいのち(人権)の意味。今年もHuRPを通して、それらに光をあてたい。(望)



特定非営利活動法人 人権・平和国際情報センター Human Rights and Peace Information Center Japan
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-17-8 丸十ビル 402号 TEL & FAX 03-6914-0085
E-mail : hurp@hurp.info URL : http://www.hurp.info/